



# 汽笛

夢や希望に向かつて  
ともに学び合う子

三津小便り 第三十一号 平成二十四年一月

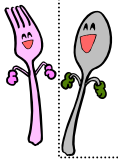
## 【内面性の人間教育を】

先日、梶田叡一氏の話講演を以下記述します。

教師が子どもの前に立つ時、最も必要とされるのは、一人一人の子どもの持つ独自の内面世界の洞察であり、配慮である。これなくして深い意味での子ども理解もないし、本来の意味での指導力も生まれてこない。こうした基盤に立って、教師は一人一人の内面世界に深く働きかけ、その内面世界に深く根付いた形で知的諸能力を育て、また、内面世界それ自体を成長発展させていく、ということではなく、真の教育とは言えない。

「確かな学力」にしても「豊かな心」にしても内面性重視が不可欠である。

教育では学力保障と成長保障（豊かな心の育成をめざす教育）の両全が求められている。この実現には教師の側に一人一人の学習者の内面世界の深い洞察が求められる。これは、学習者一人一人が教師に向けている顔（表情・態度・発言など）の裏の世界に気付くこととであり、その独自固有のあり方を理解することである。内面で何をどう感じているのか、どう考え、どう判断しているのか、どう思うやこだわりが去来しているのか、ということである。



【内面世界への着目・働きかけ】  
一、あらゆる指導・援助の前提として、内面の理解・洞察を

○一人一人の目に映っている世界は？

○この子は何に對してどういう関心があり、どういう論理で考えているのか？

二、一人一人の内面を素直に表出できる風土創りを

○何でも口にできる受容的で相互支持的な雰囲気をつくる。

○自分のその時その場での気持ちの動きや気づきを素直に口に出すよう促す。

○間違いや孤立を恐れず積極的に発言しようとする姿勢を育てる。

三、一人一人の内面のさりげない表出をとらえたい

○目（視線）と表情の動きに注意する。

○つぶやき（独り言）や隣りの子へのささやきを聴き取る。

○ノートやワークシートの記入内容に目を留める。

四、発言や助言、指示を一人一人の内面まで届かせたい

○聞きやすい声ではっきりと、子どものテンポにあわせて話す。

○教師（発言者）の方に視線を向けさせ、注意を集中させる。

○可能な限り、子どもの言葉や概念を使うように心がける。

○子どもの発達段階に特有の実感のあり方や納得の筋道を大切に作る。

○子どもの中で理解が落ち着くまで、次の発問や指示を待つ。

【防災教育は生きる力の育成】  
避難訓練の前に命を守るためにはということ、今岡先生から話をしてもらいました。とても大切な学習でした。

「家庭で地震が起きたときについて話し合ったことがある人？」と質問した時、数人の子が挙手していました。思ったより少ないので残念でしたが、こんなものかもしれません。我が家でもやっています。芸予地震の経験もあるのですが、準備したと言えば食料少しとラジオ、懐中電灯、ろうそくぐらいいし用意していません。水も用意していません。時々そばの川があふれたらとか、近くの高台がくずれたらとか思うこともあるのですが、今までなかったののでつい安心してしまいます。自分で自分を守ると言っても大人でも大変難しいことだと思えます。

しかし、早いうちから考えさせていく、意識させていく必要があると思います。児童の場合は、日常生活の中で人の話が聞けること、自分でやらないといけないことを自分でできること、自分で考える習慣をつけることなどが、大切だと思います。

今日は練習でしたが、いきなり来るのが天災です。突然起きる天災には自分しか命を守れるものはいません。自分で考え、判断、行動することが一人一人にできるようにさせることが使命でもあり、生きる力の育成につながるのだと思います。今岡先生はじめ、生徒指導部の先生方がとうございました。